

今ここで頑張っています

「継続は力なり」を信じて

埼玉大学 理工学研究科 物質科学部門
准教授 鈴木 美穂 (新制36回)



2018年2月、埼玉大学で研究室を持たせて頂いて3年、初めての修士2年生を送り出す年度末、大学の近所を自転車で走行中、車に撥ねられてしまった。

卒論や修論の手直し、実験など指示を出し、ちょっと一息、コンビニを目指した。日はとっぷり暮れていたが大学界隈の住宅街、見通しは悪いが自動車は来ていないと確信して交差点に進入した。あれ、何か当たった?と次の瞬間、路面に横倒しだった。お〜い、交通事故だぞ〜。近所から人が集まってきた。頭から出血している、タオル、タオル、止血しないと。警察呼んだか?人命第一だ、まず、救急車だ!様々な声が飛び交っている。不思議と痛みは無い。暫くして救急車が到着。痛い所を聞かれ、あちこち動かされ、肩に激痛が走った。頭を打っていたこともあり、骨折に対応可能な近隣の総合病院に搬送された。診断では、頭部陥没裂傷、鎖骨・右足骨折、全身打撲。空きベッドぎりぎり滞在を許可され、翌日手術、となった。ベッドに横たわると日頃の睡眠不足と安心感で睡魔に襲われた。が、何とか学科長、研究室の学生、親族、友人達にメールを送った。「交通事故を起こしました(遭いました?)。明日手術です。」

1986年宇佐美研究室を卒業し、東京大学大学院に進学、博士課程へと進んだ。牛は草を食んで乳を出します。もし牛の体内で起きている化学反応を全部フラスコの中で再現できたら、どうなると思いますか?という学部での衝撃的な授業と企業の研究所勤めだった父の「バイオは面白いぞ」の声で宇佐美研究室を目指した。が、全く勉学不熱心、バイオ、諸々の知識の乏しさ故の怖いもの知らずで、ヒトや病気に関わる研究をしてみたい、と思い、他大学院を受験をした。応用化学から生化学、分子生物学への専門の変換は勉学不熱心を返上しても消化不良の日々、それでも学位論文テーマとなった糖尿病に関連した研究が面

白いと夢中になった。博士課程3年時日本学術振興会特別研究員となり、もう少しこのテーマを深めて行けそうだ、と思った矢先、ご縁を頂き、埼玉大学工学部助手となった。幸いな事に講座の教授、助教授が、博士課程在学時に助手となって、仕事と学位論文の両方を進められた経験から、様々に助けて頂いた。が、ここでの研究テーマは生物物理学を基盤とする進化分子工学。面白いと感じる一方、やはり消化不良の日々が続き、アツと言う間に10年程経過、芽が出なかった。研究は面白いがどうにかしなければ、と悶々とする中、大学院生のお手伝いで蛍光特性を改変した緑色蛍光タンパク質(2008年下村脩博士がノーベル化学賞を受賞されたクラゲのタンパク質)を国際会議で発表した。マンチェスター大学薬学部教授に何か応用を考えようと声を掛けられた。海外の大学との共同研究。グラント申請、特許出願、すべてが英語。日本の大学とのシステムの違いも驚きだった。段々習得すべき知識や技術が見える様になり、パリ大学に留学、国内の大学や企業、ニューメキシコ州立大学との共同研究で蛍光タンパク質を応用した研究も生体内反応の可視化ツールやドラッグデリバリーシステム開発へと広がった。もっとしっかりした形にしたいと焦り始めたのが5年程前からだった。

交通事故後の手術、その翌朝一人でギブスの着脱が出来る様トレーニングをした後、退院(入院3日間の短期滞在)。僕だったらデスクワークは3日で復帰する、と主治医に背中を押されて日常生活をこなし、周りの人々に支えられ、メールやタクシー通勤で修論、卒論発表会を終えた。そして手足共可動域制限なし、リハビリ不要、とお墨付きをいただき、新学期を迎えた。

人との繋がりを大事にめげずに走って(歩いて?)いると何とか研究(人生?)を進めていけると信じている。